

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22300253

研究課題名(和文) 中国・内モンゴル自治区におけるバイシンの間取りの変容に関する研究

研究課題名(英文) Study on Changes of Mongolian pastoralist's living spaces in Inner Mongolia Autonomous Region, China

研究代表者

中山 徹 (NAKAYAMA, TORU)

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：60222171

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円、(間接経費) 4,050,000円

研究成果の概要(和文)：中国・内モンゴル自治区の草原地域を対象に固定式住居(バイシン)の間取りの状況と変容過程を明らかにした。調査したのは、アラシャ、赤峰市、シリンドル、ホロンバエルの4地域である。アラシャと赤峰市、シリンドルは一室型から一行三室型までは同じ変化をたどり、その後、アラシャは庭型、赤峰市は二行型に変化している。ホロンバエルは他地域とは違い東西方向に出入り口があるなど、最初から独自の変化をたどっている。

研究成果の概要(英文)：We clarified changing of Mongolian pastoralist's living spaces in Inner Mongolia Autonomous region, China. We surveyed four regions. Araxa, Xilingol, Khorchin, Hulun Boir. We found four house types in Araxa, Xilingol and Khorchin. One room type, Two rooms type and Three rooms type. The process of change was the same. But after that, the process of change was different. In Hulun Boir, the type of the house was considerably different.

研究分野：地域計画学

科研費の分科・細目：生活科学、生活科学一般

キーワード：内モンゴル バイシン 間取り 住宅

1. 研究開始当初の背景

モンゴル族の伝統的な住居は、草原での移動式住居(ゲル)である。しかし、中国内モンゴル自治区におけるモンゴル族の住居が急速に変化している。

遊牧を営むモンゴル族は長くゲルを使っていた。17世紀末頃から漢族の影響を受けた内モンゴル東北地域で農耕が始まり、定着するものが現れる。その結果、住居を移動させる必要がなく、ゲルが土で造られるようになる(これを移動式のゲルと区別してエーヴィンゲルと呼んでいる)。エーヴィンゲルには中央の炉の周りにハンジ(漢語で炕:カン)と呼ばれるオンドル式の床暖房も設置された。その後、円形から方形へと変化した。内部はゲルと同じく一部屋の空間であった(海日汗:モンゴル族住居の空間構成概念に関する研究 内モンゴル東北地域モンゴル族土屋家屋を事例として, 日本建築学会計画系論文集 579, pp.179-186,2004)。

ただし、この変化は内モンゴル東北地方の一部にとどまり、大半のモンゴル族は遊牧を営み、ゲルを使用していた。その状況が大きく変化したのは1980年代からである。80年代初頭から家畜の私有化、土地の使用権化が始まり、それまでのような長距離移動が少なくなり、移動する頻度も減少した。この頃から、固定家屋(バイシン)の建設が広い地域で始まった。しかし、この時点ではゲルも利用されていた。90年代に入ると土地の境界を柵で囲う家庭が増え、自由な移動はかなり制限されるようになった。その結果、バイシンの利用が急速に広がる。この変化を決定づけたのは2000年代にとられた生態移民政策である。これは環境対策、資源対策から出された政策であるが、この政策によって内モンゴル自治区から遊牧がほぼ消滅した。もちろん家畜の移動は見られるが、大半は自分の敷地内もしくは契約した敷地内に限定されている。住居もバイシンに代わり、多くの地域ではゲルを住居として使わなくなった。比較的ゲルを利用している地域でも、移動先での一時的な利用に変わっている。

わずか30年ほど、比較的早くバイシンを使い始めた地域でも50年程度の間で、移動式の一室住居から複数の部屋を持つバイシンに変化したわけで、現時点であればその急速な変化過程をほぼ把握することができる。

2. 研究の目的

本研究では、内モンゴル自治区を対象とし、主として牧畜を営むモンゴル族住居(バイシン)の間取り変化が、どのような理由で、どのように進んだか、地域によってどのような違いが見られるかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では内モンゴルを5地域に分け(アラシャ、オールドス、シリングル、ホルチン、フルンボイル) 下記の現地調査を行った。

<アラシャ>

2010年9月:右旗ウリントヤガチャ(12軒)

2011年6月:左旗エリキハシガソムウリテクレガチャ(9軒)

2011年9月:右旗ヤブライ鎮ダンジリンガチャ(9軒)

2012年3月:右旗ヤブライ鎮ダンジリンガチャ(14軒)

2012年6月:右旗ヤブライ鎮ダンジリンガチャ(7軒)

2012年11月:右旗ヤブライ鎮ダンジリンガチャ(7軒)

2012年12月:右旗ウリントヤガチャ(8軒)

2013年10月:エジネ旗ソゴヌルソムチゲガチャ(20軒)

<ホルチン>

2012年6月:通遼市左翼後旗スブンガチャ(18軒)

2012年8月:赤峰市パーリン右旗チャガンオスガチャ(12軒)

2012年10月:赤峰市ヘシッテン旗バインチャガンガチャ(8軒)

2012年10月:赤峰市ヘシッテン旗オーボルガガチャ(10軒)

2013年8月:赤峰市ヘシッテン旗バインチャガンガチャ(6軒)

<フルンボイル>

2013年7月:新バルグ右旗アラシャンソム(3軒)、新バルグ右旗ヘルルンソム(8軒)、新バルグ右旗アラタンエメール鎮(8軒)

<比較調査など>

内モンゴルとの比較調査などを下記の地域で行った。

福建省(2010年~2012年)

新疆ウイグル自治区(2012年、2013年)

上海市(2011年、2012年)

4. 研究成果

バイシンの種類

アラシャ、シリングル、ホルチンで確認された一般的なバイシンは一室型、一行二室型、一行三室型の3種類である。

・一室型:移動式住居であるゲルの形で固定家屋にしたもの。はじめは円形であったが、方形のものもある。部屋の内部はゲルの使い方と大きく変わらない。

・一行二室型:独立型と間仕切り型がある。独立型は一室型方形の住宅二つを東西方向につなげたもの。二部屋は内部でつながっていない。一方は日常生活で使い、他方は倉庫などに使う。間仕切り型は、一室型を間仕切りで二部屋に分け東西の二つの部屋にしたもの。二部屋は内部の扉でつながっている。東側の部屋は炊事などで使い、西側の部屋は寝室などに使っている。

・一行三室型:独立型、三室型、三室一丁型がある。独立型は一室型方形を東西方向に三

件つなげたもの。ほとんど見られない。三室型は、東西方向に三室の部屋をつないだもの。中央の部屋から出入りし、三室は内部に設けられた扉でつながっている。中央の部屋は出入り口、炊事など、東側の部屋は、客間、高齢者の寝室、西側の部屋は、夫婦の寝室、子どもの寝室として使っている。三室一丁型は、中央の部屋を間仕切りで南北に区切ったタイプ。北側は炊事、南側は玄関、手洗いなどに使っている。

アラシャでは一般的な三タイプ以外に庭型が見られた。

・庭型：一行三室型の南側に中庭をもうけ、別棟を建てる形。母屋、別棟、塀で囲まれた庭がある。別棟は炊事などに使う。

ホルチン、オールドスでは一般的な三タイプ以外に、二行三室型が見られた。一行三室型の北側に部屋を増やしたもので、一般的には中央の部屋とつながっている。北側にもうけた部屋は炊事、倉庫に使う。

一室型、一行二室型、一行三室型、庭型、二行三室型には規則性が認められるが、それ以上に複雑な間取りについては特に規則性は認められない。

フルンボイルでも、一行二室型や一行三室型を見ることができたが、他地域では異なった間取りが多く見られた。特徴的な点は下記の通りである。

・入り口：他地域では入り口が南側であった。2行型になると勝手口が北側に設けられる場合もあるが、南側の入り口が中心である。フルンボイルでは、東側もしくは西側に中心となる入り口を設けている例が多い。

・他地域では中央に設置する部屋で炊事を行うなど、中央の部屋が重要な役割を果たしている。それに対してフルンボイルでは中央が部屋ではなく通路として使われている場合が多い。

フルンボイルでなぜこのような特徴があるのかは不明である。ヒヤリングでは他民族の影響、ロシアの影響等が聞かれたが、確認できていない。

バイシンの変遷

・アラシャでは間取りが下記のような変遷をたどっている。

一室型円形 一室型方形 一行二室型(独立型) 一行二室型(間仕切り型) 一行三室型(三室型) 一行三室型(一丁型) 庭型

・ホルチンでは間取りが下記のような変遷をたどっている。

一行二室型(独立型) 一行二室型(間仕切り型) 一行三室型(三室型) 一行三室型(一丁型) 二行三室型

おそらく一行二室型の前に一室型が存在したと思われるが確認できていない。

定住の様式

内モンゴルの定住様式は生業の内容と敷地の状況に左右されている。

・アラシャではラクダ、羊、ヤギが牧畜の中心である。ラクダ、ヤギ、羊は春から夏、秋にかけて、自分の敷地に関係なく、遊牧状態とされ、ほとんど世話をしない。その期間は、都会に出て仕事をするか、観光業などに従事しており、大半の牧民は都市部に夏用の住居を所有している。冬は草原の冬营地ですごし、ここが草原生活の拠点になるため、住宅はバイシンとなっている。大半の世帯は、春营地を持ち1ヶ月程度はそこで過ごす。ただし期間が短いため、ここの住居はバイシンとゲルが併用されている。

・ホルチンでは、農業と牧畜を両方営んでいる。農業をする以上定住しかあり得ず、牧畜も原則として1箇所で行われ、住居もバイシンが一つになる。農地と牧地の両方を持っているため、ここの敷地は狭く、敷地内での移動も認められない。そのためゲルもほとんど利用されない。

・シリングルでは、牧畜が中心で、羊、ヤギが多い。アラシャとは異なり、一年を通じて家畜の世話を毎日行う。多くの家庭では冬のバイシンを持ち、夏营地が冬营地に近接している場合はバイシンが一軒である。夏营地が遠い場合はもう一軒家を持つが、そこではバイシンとゲルが併用されている。

住宅設備

住宅設備で重要なのはハンジ(中国名：カン)である。シリングルやホルチンではハンジはもともと南面に面して設けられていた。しかし一行三室型から二行三室型に住宅規模を大きくするためには北側の部屋の暖房が必要になる。そこでハンジが部屋の中央部に移動している。

フルンボイルでは床暖房でなく、壁暖房が多い。おそらくロシアの影響だと思われる。そのため、壁の位置が暖房上、重要になる。間取りとの関係では、東西方向に入り口があるプランの場合、壁暖房が東西方向に入り、入り口が南の場合、壁暖房が南北方向に入っている。

比較調査など

モンゴル族住居の独自性をより明確にするため、ウイグル族の住居、漢族の住居(土楼)の状況、保護施策について現地調査を行った。

また、都会に移転したモンゴル族が草原での住まい方をどの程度継承しているかを上海で調査した。これらについては各調査地1~2回程度の調査であり、明確な結論は得られていない。今後、機会があれば詳細な調査を行う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. 『中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第1報)』

野村理恵、中山徹 (3 番目) 他 10 名、「奈良女子大学家政学研究 Vol.56、No.2」査読有り、69 頁 78 頁、2010 年

2. 『中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第2報)』、ユンメイ、今井範子、中山徹 (3 番目) 他 9 名、「奈良女子大学家政学研究 Vol.56、No.2」査読有り、79 頁 87 頁、2010 年

3. 『中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第3報)』、野村理恵、今井範子、中山徹 (3 番目) 他 9 名、「奈良女子大学家政学研究 Vol.56、No.2」査読有り、88 頁 94 頁、2010 年

4. 『年間を通じたゲルと固定家屋の利用実態 中国・内モンゴル自治区東ウジウムチン旗における放牧民の定着化と居住環境変化』、野村理恵、中山徹、「日本建築学会計画系論文集 第75巻第654号」査読有り、1917 頁-1923 頁、2010 年

5. 『放牧民の定着化過程における「ホト」の形成と居住形態の変化 中国内モンゴル自治区シリングル盟饒黄旗の「ホト」を事例として』、野村理恵、中山徹 (2 番目) 他 3 名、「日本建築学会計画系論文集 第75巻第651号」査読有り、1141 頁 1149 頁、2010 年

〔学会発表〕(計 16 件)

1. 『内モンゴル・アラシャ盟におけるゲルに関する研究』アルンジョル、中山徹、野村理恵、「2013 年度日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2」、219 頁 - 220 頁、2013 年

2. 『中国東北地方・半牧半農地域におけるモンゴル民族の住居変容に関する研究 内モンゴル自治区赤峰市を事例として』イジョウ、中山徹、野村理恵、アルンジョル、「2013 年度日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2」、221 頁 - 222 頁、2013 年

3. 『内モンゴル砂漠地域における移動式住居に関する研究』アルンジョル、中山徹、野村理恵、鳳英、「2013 年度日本建築学会近畿支部研究報告集計画系」、381 頁 384 頁、2013 年

4. 『東北農村地域におけるモンゴル民族の住居変容について 中国内モンゴル自治区赤峰市を事例として』イジョウ、中山徹、「2013 年度日本建築学会近畿支部研究報告集計画系」、385 頁 388 頁、2013 年

5. 『内モンゴル砂漠地域における放牧民の固定式住居に関する研究』、アルンジョル、中山徹、野村理恵、蓬英、「2012 年度日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2」、43 頁 44 頁、2012 年

6. *Changes of living spaces by the settling of Mongolian pastoralists in Inner Mongolia Autonomous Region, China*, Rie NOMURA, Toru NAKAYAMA The International Federation for Home Economics 12th World Congress, Melbourne, Australia, 2012 年

7. *The real life of children away from home in innerMongolia in China*,

Yaru, Toru Nakayama, Odongerel, The International Federation for Home Economics 12th World Congress, Melbourne, Australia, 2012 年

8. 『内モンゴル砂漠地域における放牧民の住居に関する研究 アラシャを事例として』、アルンジョル、中山徹、野村理恵、「日本建築学会近畿支部研究報告集計画系」、337 頁 340 頁、2011 年

9. 『中国・内モンゴル自治区の住宅調査 シリングル盟西ウジウムチンを対象に』、蓬英、中山徹、野村理恵、アルンジョル、「日本建築学会近畿支部研究報告集計画系」、341 頁-344 頁、2011 年

10. 『内モンゴル・ゴビ草原における放牧民の住居に関する研究』、アルンジョル、中山徹、野村理恵、「日本建築学会学術講演梗概集 E-2」、497 頁-498 頁、2011 年

11. 『内モンゴル自治区西ウジウムチン旗における放牧地の利用実態』、蓬英、中山徹、野村理恵、アルンジョル、「日本建築学会学術講演梗概集 E-2」、495 頁-496 頁、2011 年

12. 『中国・内モンゴル自治区西ウジウムチン旗における放牧地の分配方法と放牧民の居住空間』、野村理恵、中山徹、「日本家政学会第 63 回大会研究発表要旨集」、166 頁、2011 年

13. 『中国・内モンゴル自治区における逆留守子どもの生活環境に関する研究、シリングル盟の西東ウジウムチン旗を事例として』、ヤル、中山徹、「日本家政学会第 63 回大会研究発表要旨集」、91 頁、2011 年

14. 『モンゴル族放牧民の季節を通じた住居の利用実態』、野村理恵、中山徹、「2010 年度日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2」、413 頁 414 頁、2010 年

15. 『放牧民の定着化過程におけるホトの空間構成の変化』、野村理恵、中山徹、「日本家政学会第 62 回大会研究発表要旨集」、128 頁、2010 年

16. 『東ウジウムチン旗におけるゲルと固定家屋の利用実態』、野村理恵、中山徹、「日本建築学会近畿支部研究報告集第 50 号・計画系」、259 頁 262 頁、2010 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 徹 (NAKAYAMA, TORU)

(奈良女子大学・生活環境科学系・教授)

研究者番号：60222171

(2) 研究分担者

武藤 康弘 (MUTO, YASUHIRO)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：80200244

増井 正哉 (MASUI, MASAYA)

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：40190350

(3)連携研究者

山本 直彦 (YAMAMOTO, NAHIKO)

奈良女子大学・生活環境科学系・准教授

研究者番号：50368007

長田 直之 (NAGATA, NAUYUKI)

奈良女子大学・生活環境科学系・准教授

研究者番号：90523829